



教科の授業以外にも

校長 尾後貫 智

先週は月曜から水曜まで学習参観と夏休み作品展を実施しました。ご来校いただきました保護者の皆様におかれましては、2学期に入り1週間が経過した子どもたちの学校での様子はいかがでしたでしょうか。また中学部3年生の保護者には30日(水)の進路説明会にもご参加いただきました。3日間で285名の方に来校いただきました。

翌31日(木)は中学部1年生がハーレムへの社会科見学、2,3年生が職場体験へ行ってきました。今年は去年の1.5倍の日系企業が子どもたちの職場体験を受け入れてくださいました。わずか1日の体験でしたが、子どもたちは体験という一断片を通して社会に触れて、教室では学ぶことのできない様々なことを刺激的に感じ学んでくることができました。9月1日(金)はバス避難訓練を実施しました。これは毎年この時期に実施している訓練です。今年は去年の訓練の反省を生かして行いましたが、運転手さんの指示でバスから降車して避難行動が5台すべてのバスで素早くできました。今回の訓練には、ブラッセル日本人学校の校長先生、事務長さん、バス担当の方が見学に来られていました。

先週は、1週間1日も途切れることなく行事が続きましたが、どれも保護者の皆様のご協力で無事に終えることができました。

今週は、月曜日に小学部1年生のアルティス動物園への校外学習がありました。子どもたちはたくさんの動物を見学し、ところどころで様々な動物に出会い大きな歓声をあげていました。また子どもたちがキリンや象のスケッチをしていると、通りがかった人たちがニコニコしながら物珍しそうにのぞいてくのがとても印象的でした。本日(6日)は、月一回行われる小学部の児童朝会がありました。今月は異学年集団による縦割り活動を新しく取り入れて活動しました。これは6年生を中心に児童主体で運営していく活動です。同学年で行動することが多く、児童間の人間関係が固定してしまいがちな本校の子どもたちの実態を考えると、他の学年の人と活動を通して接する機会を作ることは、子どもたちの社会性を育てる上でとても大事な活動だと思います。

このように普段の教科以外の活動にも子どもたちはいきいきと活動しています。



動物スケッチ (小1)



たてわり活動 (小学部)



職場体験 (中2、3)

自由研究『メロスの全力を検証』

一般財団法人理数教育研究所が主催する「算数・数学の自由研究」作品コンクールという児童生徒の作品コンクールがあります。応募作品は、日常生活や学校での学びなどから感じた疑問や課題を、算数・数学の力を活用して探究し、気付いたことやわかったことをまとめたレポートです。

その第1回「中学校の部」で最優秀賞に選ばれたのが、I県の公立中学校2年のM君の『メロスの全力を検証』という作品でした。(HPで公表されています。)

メロスとは、太宰治著『走れメロス』の主人公です。国王に捕らえられたメロスは処刑される前に妹の結婚式に出席するため、友人が人質となることを条件に3日間の猶予をもらいます。メロスは3日間のうちの初日と最終日を使い、10里(約39km)の道を往復します。

M君は「メロスがどれほどの勢いで10里の道を進んだのかを算出し、彼のがんばりを感じたい」と思って検証を始めたそうです。記述された文章からその時の時間を推測し仮定した上で、かかった時間と速度を科学的に割り出していました。

まず、「初夏、満天の深夜出発」という記述から、出発時間を午前0時と仮定しました。「一睡もせず十里の道を急ぎに急いで村に到着」という記述と、「日は既に高く昇って村人たちは野に出て仕事を始めていた」との描写から到着時間を午前10時と仮定しました。これで10里の道を10時間かけて到着したことになり、距離を時間で割って、時速3.9kmという往路の平均速度が出ました。なんとメロスは歩いていたのです。

さて、妹の結婚式の翌日、メロスは人質になった友人のところに向かいます。途中、橋が木っ端微塵になっていたり、山賊に襲われたりと、トラブルに見舞われ一旦は諦めかけるのですが、最後の力を振り絞り、約束の日没に間一髪で間に合います。しかし、M君の検証によると、復路の速さは時速5.3km。「ただの早歩き」ということでした。

それらの結果から、M君は「メロスは全然走っていないことがわかった。『走れメロス』というタイトルは『走れよメロス』のほうが合っているなと思いました」と感想を述べています。

もちろん当時の道は今よりもはるかに険しいでしょうし、仮定はあくまでもM君の想像の範疇のため、違う検証結果を導き出すことも可能です。しかし、この有名な文学作品を科学的に分析するのはナンセンスと一蹴することは簡単です。また、たとえ分析の結果がどうであったとしても、この作品の文学的価値が褪せることはありません。我々子どもにかかわる大人が大切にしたいのは、一人の中学生が自分の抱いた興味や疑問とまっすぐに向き合って問題解決しようとした姿勢のすばらしさだと思います。また、代表的な文学作品の『走れメロス』に目を付けたところが今回の研究作品の大きな魅力だと言えます。

メロスと友人の友情の物語を新たな視点から読み解くことで、まったく違ったおもしろさが現れました。まだ誰も知らなかったその発見は、M君の純粋な好奇心から生まれたのだと思います。

子どもたちの視野を広げ、興味関心を高めて知的好奇心を増幅させることができるのは、我々教師や親に他なりません。教師が柔軟な思考を持たずに教科書の域を出ない教室では、子どもたちの知的好奇心を満足させてM君のような発想やそれを検証していくような子どもを輩出していくことは、難しいと思います。まず我々大人が視野を広げ、色々なことに興味関心を持ち、時には疑問を投げかけ、子どもたちへ語っていくことこそが、子どもたちの視野を大きく広げていくことになると思います。子どもたちの視野を広げるということは、言い方を変えると、子どもたちの夢や可能性を広げることに他なりません。